

デイモンとピシアス

鈴木 三重吉

一

これは、二千年も、もっと前に、ギリシャが地中海ですっかり幅をきかせていた時代のお話です。

その頃、ギリシャ人は、今のイタリヤのシシリイ島へ入り込んで、その東の海岸にシラキュースという町をつくっていました。そこでも市民たちは、やはりみんなの間からいくたりかの議政官というものを選んで、その人たちに全ての支配を任せていました。あるとき、その議政官の一人にディオニシアスというたいそうな腕きぎがいました。

ディオニシアスは、もとはずっと下級の役に使われていた人ですが、そのもちまえの才能一つで、とうとう議政官の位地まで上ったのでした。この人のおかげでシラキュースは急にどんだんお金持ちになり、島中の他の植民地に比べて、いちばん勢力のある町になりました。

それらの植民地の中には、アフリカのカーセイジ人が建てた町もいくつありました。シラキュースはそのカーセイジ人たちと、いつもひどい仲たがいをしていました。ディオニシアスはいかにシラキュース人を率いて、それらのアフリカ人と大戦をしました。そして手ひどくうち負

かしてしまいました。

そんなわけで、ディオニシアスはシラキュース中で第一の幅きぎになりました。それでだんだんに他の議政官たちを押しつけて、町中のことは自分一人で勝手に切り回すようになりました。

ディオニシアスは、いぶんわがままな残酷な男でした。市民たちは彼のいろいろな乱暴から、ディオニシアスを蛇のように憎みだしました。しかし、市民も他の議政官も、彼の暴威に恐れて、誰一人面と向かって反抗することができませんでした。

ディオニシアスには、市民たちが、全て自分に対してどんな考えをもっているかということが十分わかっていました。ですから、始終、ちょっと油断をしませんでした。いつ誰が、どんな手だてをめぐらして、自分を殺すかもわからないのです。ディオニシアスはそのために、最後にはもうどんな人をも疑わないではおかないようになりしました。

彼は牢屋の後ろにある、大きな岩の中を、人にわからないように、そっと下から掘り開けて、その中へ秘密の部屋をこしらえました。そしてそこへ、牢屋から罪人の話し声が伝わってくるような仕掛けをさせて、いつもそこへ入ってじいっと罪人たちの言っていることを立ち聞きしていました。

それから、自分の寝室へは、誰も近づいてこれられないように、ぐるりへ大きな溝を掘りめぐらし、それへつり橋をかけて、それを自分の手で上げたり下ろしたりしてその部屋へ出入りしました。

あるとき彼は、自分の顔をそる理髪人が、

「俺はあの暴君の喉へ毎朝かみそりをあてるのだぞ。」と言って、人にいばったという話を聞き、すっかり気味を悪くしてその理髪人を死刑にしまいました。そして、それからというもの、

2 【幅をきかせる】勢力があつて、好き勝手にふるまう。

4 【シシリイ島】地中海に浮かぶ島。イタリヤのシチリア島。

5 【いくたりか】何人か。

9 【位地】地位。

9 【植民地】ここでは、ギリシャの支配下にあつた地域のこと。

11 【カーセイジ】カルタゴ。現在のチュニジア共和国の地名。アフリカ大陸の北東に位置し、シチリア島に近い地中海に面している。

5 【暴威】乱暴で荒々しい勢い。

15 【ぐるり】周囲。まわり。

18 【顔をそる】ひげをそる。

もう理髪人を抱えないで、自分の娘たちに顔をそらせました。しかし後には、自分の子がかみそりを持ってあたるのさえも不安心でなくなりました。それでとうとうひげをそるのをやめて、その代わりに、栗の殻を真っ赤に焼かせて、それでもって、娘たちにひげを焼かせ焼かせしました。

ある日彼は、アンティフォンという男に向かって、真鍮はどこから出るのがいちばんいいかと尋ねました。すると、アンティフォンは、

「それはハーモディヤスとアリストゲイトンの鑄造のがいちばん上等です。」と答えました。ディオニシアスは驚いて、たちまちその男を殺させてしまいました。ハーモディヤスとアリストゲイトンの二人は、ギリシャのアゼンの町の勇士で、その暴君のピストラッスという人の子供らを切り殺した人たちです。この二人の像がアゼンに立っていました。アンティフォンは大胆にもそれを引き合いに出して、ディオニシアスにあてつけを言ったのでした。

またあるとき、ディオニシアスは、友人のドモクレスという人が、たった一日でもいいから、ディオニシアスのような身分になってみたいと言って羨んだということを知りました。それですぐにそのドモクレスを呼んで、さまざまの珍しいきれいな花や、香料や、音楽を備えたそれはそれは、立派なお部屋に通し、できる限りのおいしいお料理や、価の高い葡萄酒を出して、力いっぱいごちそうをしました。

ドモクレスは大喜びをしました。しかし、そのうちにふと顔を上げてみますと、自分の頭の真上には、鋭く尖った大きな刀が、一本の馬の尾の毛筋で真逆さにつり下げられていたので、びっくりして青くなりました。これはディオニシアスが、俺の境遇はちょうどこのとおりだということを見せてやろうというので、わざわざしくんだのでした。

ディオニシアスは、こんな乱暴な人でしたけれど、それと一緒に、一方にはたいそう学問があり、いろいろの学者や詩人たちを、いつもそばに集めていました。そして自分でもどんな詩を作りしました。

あるときディオニシアスは、フィロセヌスという学者が、自分の作った詩をけなしていると聞いて、たいそう怒って、すぐに捕まえて牢屋へ入れました。

そのうちにディオニシアスは、また一つ詩を作りました。そして自分では、こんな立派な詩はちょっと誰にも作れまいと大得意になって、さっそくフィロセヌスを牢屋から呼び出して見せつけました。フィロセヌスがその詩を読んでしまますと、ディオニシアスは、どうだ、それでもまだ悪いというか、といわぬばかりに、相手の顔を見下しました。

するとフィロセヌスは、なんにも言わずに、くるりと獄卒のほうを向いて、

「おい、もう一度牢屋へ入れてくれ。」と言いました。

ディオニシアスもこのときばかりはくすくす苦笑いをしました。そして、相手の正直なことを褒める印に、そのまま解放してやりました。

しかし、ディオニシアスについて伝えられているお話の中で、いちばん人を感動させるのは、恐らくピシアスとデモンとのお話でしょう。

この二人は、どちらもピサゴラスの学徒といって、ピサゴラスという、ずっと昔にいた学者の教えを奉じている人たちでした。

1 【抱える】雇う。

2 【あたる】顔をそる。ひげをそる。

5 【真鍮】金属の一種。銅と亜鉛を溶かして混ぜ合わせたもの。

7 【鑄造】溶かした金属を型に流しこんで、ものをつくること。

9 【アゼン】アテネ。現在のギリシャ共和国の首都。

9 【ピストラッス】古代ギリシャの独裁者。ペイシストラッスとも。彼の死後、息子二人が悪政を引き継いだといわれる。

11 【あてつけ】相手への不満を遠まわしに言ったり、わざといやみっぽい行動をしたりすること。

12 【ドモクレス】ダモクレスとも。あとに語られる頭上の刀のエピソードは、「ダモクレスの剣」として、栄えていても常に危険が身近にあるという意味の故事成語になっている。

1 【学問がある】深い知識をもっている。

10 【獄卒】牢屋の番人。

17 【ピサゴラスの学徒】古代

ギリシャの哲学者ピサゴラスの思想を信奉した集団。ピタゴラス学派とも。

18 【奉じる】教えや命令を大切に、心からそれに従う。

ピサゴラスという人は、どんな人で、どんなことを説いたかということ、今ははっきりわかっておりません。ただ、この派の学徒たちは、すべて感情をこらすということ、その中でもとりわけ怒りを抑えること、そして、どんな苦しいことでも、じっと我慢するということを、人間の第一の務めだと考えていました。こういうふうに関心や感情や欲望を抑えつけることを自制といえます。ピサゴラスの学徒は、人間はこの自制が少しでも多くできればできるほど、それだけ神様に近づくのだ、生涯完全な自制をもって突き通してきた人は、死んだ後には神様になれる、その反対に、少しでも自分を抑えつけることができなくて、いろいろの悪いことをした者は、次の世には、獣や、またはそれ以下の動物に生まれてくるのだと信じておりました。

それらの学徒は、お互いに、いつも固く団結して、いろいろの学問を修めていました。特に数学と音楽とをいちばん大切なものとして研究しました。

その学徒の一人のピシ阿斯という人が、シラキュースに来ておりましたが、それがいつもディオニシ阿斯に反抗しているように睨まれて捕縛されました。ディオニシ阿斯はいきなり死刑を言い渡しました。

ピシ阿斯は、それではおおせのままに殺しておもらいしましょうと言いました。しかし、その前に一つお願いがあります、私はギリシヤに土地をもっており、身内の者もおります。それで、一度あちらへ帰って、全てのことを片づけておき、すぐにまた出てきて処刑を受けますから、どうぞしばらくの間お許しを得たいと言いました。

ディオニシ阿斯はそれを聞いて嘲笑いました。そんなにして、まんまと遠い海に向こうへ逃げたあとに、またわざわざ殺されに帰るばかがあるものか、そんなふざけた手でこの俺が丸められると思うのかというように、からからと笑いました。

ピシ阿斯は、

「しかしそれには、私が帰るまで、身代わりになってくれる者がいるのです。私の友達の一人がちゃんと引き受けてくれるのですが。」と言葉をついで言いました。

「ははは、それはおまえがからかわれたのだよ。そんなことで、むざむざ命を捨てるお人よしがどこにしよう。」とディオニシ阿斯は笑いました。

すると、そこへデイモンという人がすかさず出てきました。

「どうぞ私をピシ阿斯の代わりにお留めおきください。もし、ピシ阿斯があなたを欺いて、ご指定の日までに帰ってまいりますませんでしたら、すぐに私をお殺しくください。」と言いました。

ディオニシ阿斯は、デイモンのその申し出を聞いて、むしろびっくりしてしまいました。そして、よし、それではピシ阿斯の言うとおりにさせてやろうと言いました。ともかくそれは、デイモンのばかきかげんを試すのにちょうどおもしろいと思ったからでした。

デイモンは代わって牢屋へ閉じ込められました。ディオニシ阿斯は、獄卒に言いつけて、絶えずデイモンの様子を見張りをさせておきました。しかしデイモンは、いつまでたってもちょっとも不安そうな様子を見せませんでした。

「私はピシ阿斯を信じている。ピシ阿斯は立派な人だ。決してうそはつかない。もし、万一、あの人の帰りが遅れたとしたら、それは、彼の悪いせいではなく、やむをえない不意のできごとが妨げをしたのである。そのときには私は喜んであの人の代わりに殺されてみせる。」

デイモンはこう言って落ち着き払っておりました。

ところがディオニシ阿斯が考えていたように、とうとう定めの日がきて、ピシ阿斯はそれなり帰ってきませんでした。デイモンはそれでもまだ平気でいました。

12 【睨まれる】悪意をもって目をつけられる。

14 【おおせのままに】おっしゃるとおりに。

18 【嘲笑う】相手をばかにして笑う。

19 【手】やり方。方法。

19 【丸める】うまく話して相手を信用させ、自分の思うとおりに動かす。丸めこむ。

3 【言葉をつく】言葉をあとからまた加える。

4 【むざむざ】みすみす。この先どうなるかわかっているのに、何もしないでそのままにする様子。

16 【やむをえない】しかたのない。

19 【それなり】そのまま。それっきり。

「これは来る途中で海が荒れてもしたのに相違ない。何、私が殺されればそれでいいではないか。」とデイモンは獄卒に言いました。

ディオニシアスは、それ見ろと笑いました。そして、いよいよ今日の何時までに帰らなければおまえを殺すからそう思えと言いました。

まもなくその時間が迫ってきました。デイモンは容赦なく死刑場に引き出されました。獄卒は死刑の道具をそろえて待っていました。デイモンは、もう二、三分間もたてば冷たい死骸になってしまふのです。しかし彼は、その間際になっても、ピシアスは決してうそをついたのではない、ただ、やむをえない事情で遅れたのだと信じていました。

すると、そこへ、ピシアスがひょいと帰ってきました。ピシアスはデイモンの手をとって、ああ、ちょうど間に合ってよかったと喜びました。そして、にこにこ笑いながらデイモンと代わって静かに死刑を待っていました。

ディオニシアスはすっかり驚いてしまいました。

そして、即座にピシアスの罪を許してやりました。こんな立派な人を殺すことは、いくらこの暴君にだってできるはずはありません。ディオニシアスは、それから改めて二人を自分のそばへ呼びました。

彼は、これまでかつて人を信ずることのできなかつた、哀れな人間です。彼はしたいままの乱暴をしました。そうしておいて自分の命を少しでも長く盗むために、あらゆる人を疑りました。そのためには多くの人をどんどん殺したり押し込めたりしました。ですから彼はピシアスとデイモンとの二人のこの信実と友愛とを見ると、本当に何よりも羨ましくてたまりませんでした。彼は二人に向かって頼みました。

「どうぞ、これから私をもおまえさんたち二人の仲間に入れておくれ。そして三人で本当の友達になりたい。」

こう言って、ピシアスとデイモンの手をとったということです。

〈出典 『日本児童文学名作集(上)』(岩波書店、一九九四年)〉

【著者】鈴木三重吉(すずき みえきち)

一八八二(明治一五)年—一九三六(昭和一一)年
小説家、児童文学作家。広島県の生まれ。

【著書】童話集『湖水の女』、小説『千鳥』『桑の実』など

16 【信ずる】信じる。
【したいまま】自分の望みのとおり。

19 【信実】真面目で、偽りのないこと。

19 【友愛】友情。友達への思いやり。